

5. 今後の展望

本ワークショップ開催後の2019年2月に環境省、3月に厚生労働省からゲノム編集技術を利用して得られた生物や食品等の取扱方針がまとめられ、具体的な方針が明らかとなった。さらに、農林水産省や文部科学省、経済産業省も各省の所掌を踏まえた取扱方針を示した。現時点ではまだ日本で上市されたゲノム編集作物・食品はないが、今後、多くの民間企業や公設試がゲノム編集技術を活用した作物育種を進められることを期待する。本ワークショップや研修会がその1つの契機となれば幸いである。本稿では2017年

度と2018年度に開催した植物ゲノム編集技術ワークショップについて述べたが、本ワークショップは2019年度も10月から11月にかけて福岡、大阪、名古屋で開催した。また2020年1月には東京で一般の方にも参加いただけるワークショップを実施した。

ゲノム編集技術を育種現場に普及させていくことも重要であるが、アンケートにもあったように消費者に受容されなければ作出された作物は普及しない。そのため農研機構ではゲノム編集について一般市民に正確な情報提供を行うアウトリーチ活動も進めている。2017年度、2018年度には農林水産省の委託事業（農林水産先端技術の社会実装の加速化のためのアウ

トリーチ活動強化委託事業）を受託し、サイエンスカフェや出前講義、工作・実験教室、科学イベントへの出展など、2年間で160回のイベントを実施し、約5,000名の方とのサイエンスコミュニケーション活動を行ってきた。2018年度には食を中心とした業界関係者（ステーキホルダー）を対象とした情報提供および情報収集を9回、約500名に対して実施し、ゲノム編集技術の普及を図っている。

ゲノム編集の特性を生かし、消費者にとって魅力のある有用な作物が開発されることが普及と受容の前提であることは言うまでもないことであるが、私たちの活動もゲノム編集技術の有効活用の一助となれば幸いである。

田畑の草種

姫稈萩（ヒメミソハギ）

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

ミソハギ科ヒメミソハギ属の一年草。日本全土の水田や湿地に普通。高さ20cm～30cm。大きな草体ではよく分枝するが抽水状態や小さな草体ではあまり分枝しない。茎は4稜で葉も枝も十字対生状に伸長する。葉腋に1.5mmほどの小花が密生する。花卉は淡紅色で4枚、ごく小さいか、ないものもある。

日本在来であるがその地味な花ゆえに人目につくことはなかった。ところが最近になって、田んぼに背丈が50～60cmで十字対生状に葉や枝を出す草が目につくようになった。花色が淡紅色であることからヒメミソハギかと観察すると、葉の幅が随分と狭く、基部が耳のように丸く広がって茎を巻いている。北アメリカ原産のホソバヒメミソハギであった。

ホソバヒメミソハギはヒメミソハギに比べると背丈も高く花も大きく、田んぼの中や畦際にあっても比較的よく目立つが、ヒメミソハギはほとんど目立たない。そんな目立たないヒメミ

ソハギであるが、和名は「姫」「稈萩」で、ミソハギに似ていて小さく可愛いから名付けられたとされる。その和名のもとになった「稈萩」は花が咲くと遠目にも良く目立つくらいに鮮やかなのではあるが・・・。

ミソハギは「稈」「萩」からミソハギと名付けられたという。しかし蝶形花でもなく、複葉でもなく、およそ「萩」の仲間からは程遠い。ある説によると、水辺に自生しているミソハギを遠目に見た時、あたかも「萩」の花のように見えたからというが、その「稈萩」より小さくて「かわいい」からと名付けられた「姫稈萩」は、遠目に見ようと「萩」の面影はない。同属の帰化種である「細葉姫稈萩」や最近九州方面から広がりがつつある「南国姫稈萩」なども、「姫稈萩」より花はわずかに大きい「稈萩」に比べてどれもこれも地味な花であり、およそ「萩」らしくはない目立たない花である。